

◁研究会報告▷

第11回PFシンポジウム報告

実行委員長 水木 純一郎 (NEC基礎研究所)

第11回PFシンポジウムの実行委員長という大役を無事(?)に終えることが出来、ほっとしているところである。以下に簡単にその報告をする。

正月明け早々の1月10日、11日の両日、第11回PFシンポジウムが高エネルギー物理学研究所で同放射光実験施設とフォトンファクトリー懇談会の共催で開かれた。まだ正月気分が残っていたであろうに参加人数約240名、ポスター発表件数180件と昨年を大きく上回る盛況で、討論に花が咲いていた。例年と比較した今回のプログラムの特徴は、

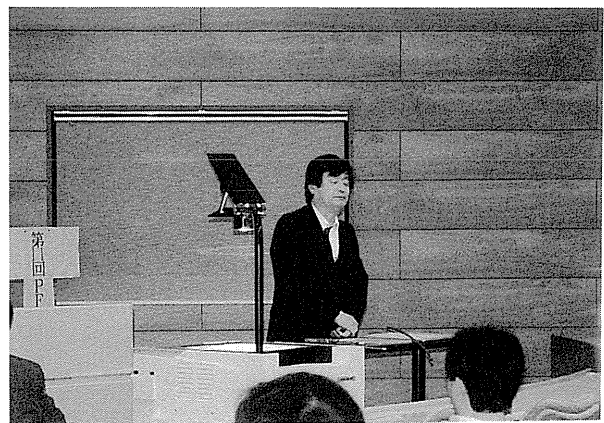
- (1) PFを利用した最近注目を集めている研究の中から3件の招待講演を持った。
- (2) 国際結晶学連合 (IUCr) の会長である Prof. P. Coppens の NSLS での最近の activity に関する講演を持った。
- (3) 夜のセッションに、4つの分野別に分かれてビームラインのスクラップ&ビルト、実験・研究設備に関する user と staff との意見交換の時間を設けた。
- (4) KEK の菅原寛孝 所長による「KEKにおける放射光実験施設」と題した講演を持った。

である。特に(3)については、お酒が入ったことが良かったのか各分野でかなり活発な議論がなされたようで、user と staff の意志の疎通がうまく行われたのではないと思われる。菅原所長からは、KEK としての将来計画の中でトリスタンリングが B-Factory に転用されること、そのために MR の放射光利用は基本的に無くなったこと、しかし、B-Factory の建設が開始される前のある時期

テストビームライン建設が前向きで計画されていること等、将来計画についてふれられた。その中で、Spring-8 を頭に置いた将来計画の重要性を述べられた。このことは、岩崎施設長からも今後とも PF が発展していく上で重要であることが初日の施設報告の中で述べられた。

二日目の午前に、前日夜に行われた user と staff との意見交換のまとめとして、それぞれを代表して下村氏 (PF)、前田氏 (岡山大)、宮原氏 (PF)、若林 (阪大) からスクラップ&ビルトを含めた今後の PF に対する要望を中心に発表して貰った。それを受けた形で測定器系の松下主幹から、現在 PF が計画、立案しているビームラインのスクラップ&ビルト案を話された。そのための基本的な考え方は、

- (1) 古くなったビームラインの競争力の回復
- (2) 単一目的の専用ビームラインを増やす
- (3) 高輝度化に対応したビームラインの建設



写真：菅原弘孝 KEK 所長の講演風景

であり、いくつかの例を挙げて説明された。今後は、マシントイムの集中化がactivityを上げるためには必要ではないかと強調されていたように思う。

今回のPFシンポジウムでは、MRの放射光転用の可能性がほぼ無くなったという外部userとPF staffを含めた放射光研究者にとって必ずしもいい話ばかりではなかったが、それでもトリストン物理実験が終了か、あるいはそれ近くで、かつB-Factoryの建設が開始される前のわずか数カ月を利用したMRの放射光利用計画が発表された。なんと貧欲でしたたかなんだらう。ここに真の研究者のあるべき姿を見たような気がする。私自身の反省を促されたセッションであった。

最後に感想を一つ。先に示したように黙っていてもポスター発表件数が180件も集まった。これは放射光学会年会在が毎回(!?)投稿をお願いしていることを考えると嘘みたいな有り難い話である。現在、年会とPFシンポジウムを合同にしては、という案が出ているようである。確かに、参加する者にとって2回が1回になる便利さは歓迎されることではあるが、今健全なPFシンポジウムのよさが

失われることを心配する。むしろこの際、年会のあり方を考えてみては如何だろうか？

実行委員長という大役を満身に果たせたとは思っていない。しかし、それでも多くの方々の参加をいただいて無事終わることが出来たのは、本シンポジウム実行委員、PFスタッフ、各セッションの世話人、アルバイト、そして参加者各位の御協力のおかげである。心よりお礼を申し上げ、また次回PFシンポジウムがより充実したものになるように祈っている。

最後に、今回のPFシンポジウムを支えてくれた実行委員の方々を紹介しておく。

実行委員長		水木純一郎 (NEC基礎研)
実行委員	庶務	柳下 明 (PF)
	庶務	籠島 靖 (PF)
	プログラム	塩谷巨弘 (東京水産大)
	会計	田中雅彦 (PF)
	会計	難波秀利
		(東大スペクトルセンタ)

◁海外情報▷

ESRF・SRS 実験記

東京大学物性研究所・日本学術振興会特別研究員 藤久 裕司

SPring-8の建設が急がれる中、フランスのESRFは第3世代大型リングのトップに立ち、すでに1994年秋の共同利用を目前にしている。イギリスのDaresbury研究所(以下DL)に滞在中の著者は、高圧物性を専門にしていることが幸いして、1993年5月のテスト実験に参加することができた。ESRFを見学された読者は多いが、6Gevリ

ングのUndulator光を体験した方はまだいないと思われるので、実験後の感想を報告する。実験内容の詳細についてはESRF newsletter No.18のDaniel Hüusermann氏の記事を読んでいただきたい。並びにDLの2.0GeV放射光施設SRSについても同様に紹介する。

まず1993年5月におけるESRFの使用可能ポー